

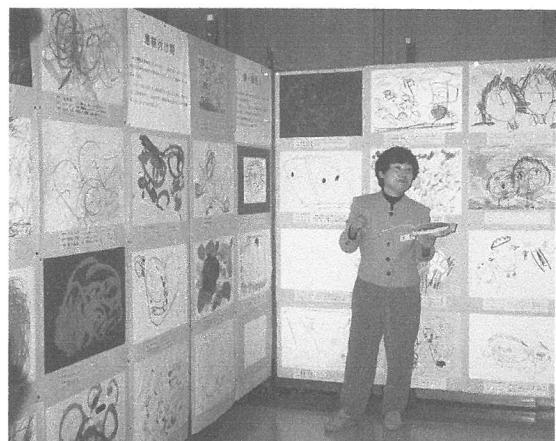
バトンゾーン

第35回



全障研大阪支部長

大島悦子さん



「障害のある子どもに学ぶ図工展」現地学習会にて
大阪市内の小学校・特別支援学校小学部の図工展で、
1993年～2014年まで21年間実行委員長を務める

教員としてはじめて赴任したのが大阪府南部の貝塚市にあつた大阪市立貝塚養護学校（病弱虚弱児、肥満児、喘息、結核などの子どもたちが親元を離れて病院や寄宿舎で過ごす。大阪市の方針により2009年に閉校）です。2年間という短い期間でしたが、大切なことをたく

受け始めます。職場も1ヶ月の実習を快く送り出してくれ、次の年には教員として採用されるに至りました。

教員としてはじめて赴任したのが大阪府南部の貝塚市にあつた大阪市立貝塚養護学校（病弱虚弱児、肥満児、喘息、結核などの子どもたちが親元を離れて

さん教えてくれた「私の学校」でもありました。障害・発達・生活の視点をもつて子どもをとらえること、実践記録を分析するおもしろさ、教職員の集団づくりや学校づくり――ここで学んだことが私の教育実践の根っこになっています。

哲くんとの出会い

23歳で結婚し、大阪府北部に引っ越すことになりました。府内の養護学校に転勤希望を出すも叶わず、大阪市内の中学校に行くことに。障害児教育から離れてしまふのかと転勤を悔やみました。ところが、養護学校義務制を前に大阪は地域の学校に養護学級（特別支援学級）をつくる方針を出したことで、思いがけず転勤先に新設される養護

学級担任となりました。

当時の大阪市の学校現場は同和問題が色濃く反映して、教職員組合も障害児教育も「原学級保障論（みんな一緒に共生共育）」が支配していました。「解放同盟」と一体になって、障害児教育に対して「差別だ」「障害児も普通学級で」と攻撃されていたのです。思うようにいかないことばかりで、家に帰つては布団の中で泣いていました。この学校では3人の子どもを生み育て、組合民主化の運動に加わりました。また、この時期に恩師である高橋宏先生（元大阪市小学校養護学級。全障研大阪支部副支部長を1970年から約30年務める）と出会います。1986年、3人目の子ども（の育休明けに転勤した2校目も、原学級保障の考えが強い学校でした。90年度には重度でよく動き回る哲くんが入学。両親は普通学級を希望しました。彼の入学をめぐっては何度も職員会議で話し合われましたが、担

任を希望する人はいませんでした。原学級保障論を高々と主張していた人たちもだんまり。

この時、手を挙げてくれたのが、学校内外での信頼が厚く、子どもを大切にした学校づくりを中心になって進めてきた舛田佳代子先生でした。普通学級、養護学級、お母さんと協力して哲くんの姿とねがい、要求に寄り添つていくなかで哲くんは大きく成長していきました。そして2年生からは養護学級在籍となつたのです。

93年度にはいくつもある教職員組合（学校に6つ！）も一致して、養護学級に加配教員の配置を訴え、実現します。これらのとりくみをまとめて、その年の全障研大会（第27回新潟大会）の「共同教育分科会」で報告しました。共に切り拓いた舛田先生と一緒にレポート報告で話しました。この時から共同教育分科会に関わつていくことになります。（3月号に続きます）

大阪に出てきて50年

私の生まれは石川県小松市、家は牧場を営んでいました。父は故郷に錦を飾るのを夢見て、家業には精を出さず、流行りの事業に手を出しては失敗。母は

その尻拭いをしていました。牧場は慢性的な人手不足で、住み込みの従業員の中には特殊学級を卒業した方や精神的ハンディのある方もいました。高校を卒業するまでは毎朝牛乳配達の手伝いをしていたので、彼らと一緒に暮らし、働くことが当たり前のなかで育ちました。

経済的に厳しい状況だったこともあり、「女でも生きていけるには、手に職を持ちなさい」が母の口癖でした。中学生の時に読んだ近江学園のことが書かれた記事に影響を受けて、卒業後は看護師になりたいと思つたのですが、家族からはせめて高校は出るようになってくださいと

が母の口癖でした。中学生の時に読んだ近江学園のことが書かれた記事に影響を受けて、卒業後は看護師になりたいと思つたのですが、家族からはせめて高校は出るようになってくださいと

そして教員へ

大学では「セツルメント」というサークルに入りました。地域の子どもたちと放課後遊びます。貧困世帯の多い地域でもあったので、子どもたちの後ろにいる親の生活や社会の背景についても学びました。実践記録を書いて仲間と語り合う時間は楽しく、この大阪の仲間たちと離れたくない、子どもと関わる仕事がしたいと思うようになりました。

卒業後は大阪市の実習訓練助手に採用され、肢体不自由児養護学校に配属されました。全障研のサークルもあり、初めて全国大会（第9回埼玉大会）にも参加しました。同期の仲間と学ぶなかで「教員になりたい」という思いを強くし、通信教育を

権利としての障害児教育を次世代につなぐ――学校づくり・仲間づくり（上）